JISS 国立スポーツ科学センター

News Letter ニュースレター Vol.22

JISS 2012

[特集]
ロンドンオリンピックに向けて

[特集]
第8回JISSスポーツ科学会議 ～JISS 10年の歩みとこれから～

ロンドンオリンピックに向けて

7月27日からロンドンオリンピックが開催される。夏季の近代オリンピックとしては30回の節目を迎える本大会に、公益財団法人日本オリンピック委員会（JOC）は国・地域別の金メダル獲得数で世界5位以内の目標を掲げている。JOC選手強化本部長の上村春樹氏にその意気込みを聞く。

メダル獲得世界5位以内をめざして

上村春樹
（JOC選手強化本部長・全日本柔道連盟会長）

オールジャパンで挑む

今年のロンドンオリンピックは1912年に日本がストックホルムオリンピックに参加してから100年目の節目にあたります。このときの選手団は役員2人・選手2人のたった4人でした。このとき選手団団長として参加されたのが、講道館柔道の創始者である嘉納治五郎師範でした。嘉納師範はご承知のように日本人初のIOCの委員でもあります。そのオリンピックに、私が団長として行かせていただくことには大きな縁を感じており、また重責を感じています。

北京オリンピックが終わってからの4年間、JOCでは、各競技団体から出していただいた強化プランを踏まえながら、メダル獲得に向けて取り組んできました。JOCとしては金メダル獲得順位について世界5位を目標としておりますので、是非達成したいと思っています。昨年、日本は東日本大震災という未曾有の大惨事に襲われましたが、オリンピックで底力を見せたいと考えています。

ロンドンオリンピックは、ナショナルトレーニングセンターが開設されてから丸4年間、同センターを拠点として強化に取り組んできた初めてのオリンピックです。〝オールジャパン〟で強化に取り組む体制ができ、日本選手団がひとつのチームとして取り組む初めてのオリンピックと言ってよいでしょう。なんとしても成功させたいと思っています。

ロンドンオリンピックで成功するには、各競技団体への支援体制が大きな鍵を握ると思っています。競技に関する強化は各団体が真剣に取り組んでいますが、オリンピックの競技内容が高度化するにあたり、単に強さを求めて練習を続けているだけでは満足な結果を得ることが難しくなりました。医・科学、情報などのスペシャリストと密接な連携をとり、強化に取り組んでいかなければ世界で戦うことは難しい。それゆえ、JISSに求められる役割はとても大きくなると考えています。JISSは、日本のスポーツの強化現場に密接した機関です。大きな期待を寄せているところです。

強くなるにはチーム力が不可欠

私は、1988年ソウルオリンピックの柔道日本代表の監督でしたが、柔道は金メダルが1個と惨敗を喫しました。そのとき以来、世界で戦うための強化体制とはどうあるべきかを考え、選手個人にそれを任せるのではなく、チームとして強化に取り組むべきではないかと考えるようになりました。ソウルオリンピック以降、柔道ではJISSにドクターをはじめ、栄養士、メンタルトレーナーなどたくさんの専門家の協力をお願いし、強化につとめてきました。

このような取り組みに柔道はいち早く手をつけた方ですが、競技間で支援体制に大きな差がありました。少し前までは練習場の手配、宿泊場所の手配などは、各競技団体で行なってきましたが、近年は支援体制が整い、競技に専念できるようになりました。とくに医・科学の分野での発展が大きく、現在もJISSでリハビリをしている選手がいますが、そのような体制が整ったのは本当に心強いと思います。

2008年から開始した『チーム「ニッポン」マルチサポート事業』は本年で4年目を迎えます。トップアスリートが最高のパフォーマンスを発揮し、世界の強豪国に競り勝ち、確実にメダルを獲得することができるよう、現地・大会情報の収集、心理学・生理学・栄養学等の活用、用具・トレーニング機器の開発、トレーニング方法の開発等の多方面からの高度な支援をしていただくものです。このシステムができ、日本選手団とは単に選手・監督・コーチだけでなく、競技にたずさわるすべての人々が日本選手団であると考えています。

マルチサポート・ハウスに期待

また、今回、マルチサポート・ハウスをロンドンに開設することが決定しましたが、このハウスは選手にとって本当に大きな力となることでしょう。選手村から歩いて15分の距離にあり、マッサージやケガの治療を受けることができ、心理カウンセラーも常駐する予定と聞いています。

オリンピックに出場する選手は、何十年とその競技に従事し、オリンピックで活躍するために血のにじむような努力をしています。しかし、パフォーマンスを発揮するのはたった1日、それも数分のうちにベストを出し切らなければなりません。それができる選手でなければ世界で戦うことはできませんが、マルチサポート・ハウスがあることで、選手はよりベストな状態で競技に臨めると考えています。わずかな差でメダルの色は銀から金になることはあるのです。金メダル獲得5位以内の目標を達成するために、ロンドンオリンピックまでの4ヶ月、最大限の力を出し切ることができれば、その目標は達成できると考えています。その環境をつくることが、我々の仕事です。

選手の地力は上がってきています。本番前の1週間の調整で失敗して本来の実力の7、8割の力しか出せなければメダルは狙えません。選手自身が自信をもって競技に臨めるのか、その自信をつけさせてくれるのが、JISSの皆さんをはじめとするサポートスタッフだと思います。

JISSには今後も〝最先端〟ということを意識してほしいと思います。選手たちが勝つために必要なことは何か、それを求め続けてもらいたいと思います。

すべての物事の結果には必ず理由があります。スポーツで言えば負けにも理由があり、勝ちにも理由があります。勝ちにはラッキーがありますが、負けにアンラッキーはありません。

これまでオリンピックで日本人が獲得した金メダルは123個です。金メダルを獲得するために選手が主体となってさまざまな努力をしてきましたが、これからは個人のみで金メダルを目指すには限界があります。日本人の良さを生かした強化をするにも、日本が一丸となって行なっていくことが求められます。その一翼を担うのがJISSの皆さんではないでしょうか。今後、オリンピックで金メダルを獲得するにはたくさんの人が、そのメダリストに関わるような体制を作らないといけないと思います。その役割を大いに期待したいと思います。

（談）

ロンドン2012に向けたJISSのサポート

平野 裕一（スポーツ科学研究部）

より総合的に、より手厚く

ロンドン2012派遣前の「メディカル・フィットネスチェック」が2月1日にスタートしました。日本オリンピック委員会（JOC）と連携して、オリンピック前の半年間に、日本を代表するに足る心身の状態かをすべての選手についてチェックするものです。ロンドン2012間近という感じがしてきました。

余計な負担を選手にかけないように、このチェックでは簡潔な内容にしていますが、実は、メディカルデータはオリンピックに帯同するドクターが現地で対応する時のベースになる、フィットネスデータはこれまでのサポートを顧みてラストスパートを考えるベースになる、ということで非常に重要なものなのです。

さらに、もう少し詳しい、競技団体から要望されたチェックもロンドン2012に向けて進められています。思い返してみると、北京2008に向けて4年間、ソフトボール女子では選手のパワーアップに取り組みました。その効果をオリンピック年の4月にチェック、選手はそれを確認して北京へと向かっていったのでした。メディカル、栄養、心理といったトレーニング以外の分野も含めて、このように効果を確かめるチェックがこれからさらに多くなっていきます。

これらベースとなるチェックデータをもとに、種目に特化したサポートについては、現在、ロンドン2012に向けてのラストスパートを競技団体スタッフと詰めている段階です。ご存じのように、JISSの「医・科学サポート」では、「フィットネス」「動作分析」「トレーニング」「レース・ゲーム分析」「栄養」「映像技術」「心理」「情報技術」という8つの分野からサポートさせていただいています。そして、ロンドン2012でのメダル獲得をめざしたマルチサポート事業、その「アスリート支援」と呼ばれるサポートでは、さらに、「医学」「情報戦略」「マネージメント」という3つの分野を加えて、より総合的に、より手厚くサポートさせていただいています。目的からして、こちらのサポートではメダル獲得が有望視されている種目（ターゲット競技種目）のトップ選手が対象になるわけです。

いずれのサポートでも、種目によって必要な分野は違いますし、その優先順位もあります。その辺り、漫然とではなく絞り込んでいくサポート、しかも闇雲にではなく選手・指導者の状況・空気をよく掴んだサポートを心掛けたいと思っています。そして、目標に基づいた計画的なサポートをしてきたわけですから、ラストスパート前のこの時期に、今一度、どう計画してきたのかをJISSスタッフは反芻する必要があると思っています。

一方で、「選手・指導者とJISSスタッフが相談しやすい場」をJISSは目指していますが、これからの時期、選手・指導者は競技により集中していきますから、相談しやすさのためにはJISSスタッフのほうからトレーニング場にもっと頻繁に出向く必要があると思っています。また、ある指導者と一緒に食事をさせていただいた時に、「セミナーでJISSスタッフと一緒になっても構えてしまうから本音は言いにくいよ、こういう場なら言えるがね」という話を伺いました。当然のことですが、自然体で接することのできるこのような場、これも必要と思っています。

発信力を更に高めたい

最近、「JISSからの発信」ということを考えさせられています。JISSのサポートについてお話させていただく機会をできるだけ多くつくってはいますが、それでも競技団体からはその仕組みがよくわからないと指摘されます。また、ある県で今後のJISSの取り組み、「ジュニア選手をもっとサポートしていくので、ジュニアが実際にトレーニングしている地域との連携をよろしく」という話をさせていただいたら、その取り組みが情報として届いていないと指摘されました。発信力を高めることも、ロンドン2012に向けてのサポートの質を高めることにつながると思っています。

最後に、ロンドン2012の直前及び期間中、選手のコンディショニングや、試合に役立てる映像の編集や情報の収集のためにつくるマルチサポートハウス、これもサポートのひとつです。詳しくは別に紹介させていただきますが、JISSの分所とお考えいただき、十分にご活用ください。

第8回 JISSスポーツ科学会議

The 8th JISS Conference on Sports Sciences

JISS10年の歩みとこれから

2011年10月20日（木）●会場・国立スポーツ科学センター

今回のスポーツ科学会議はJISS創立10周年にちなんで、テーマを「JISS10年の歩みとこれから」と題し、2010年のバンクーバー冬季オリンピックとカナダの躍進に尽力された「オウン・ザ・ポディウム」プログラムのロジャー・ジャクソン創設者兼初代CEOをお迎えしての特別講演、JISSを拠点にトレーニングに励まれたメダリストを交えた3部構成による特別パネルセッションの2つを開催した。彼らが知る、最高峰をめざすためのサポートについて広く意見を聞くことができた。

カナダにおける「オウン・ザ・ポディウム」プログラム

――国によるハイパフォーマンス・スポーツシステムの構築と国際大会での成功

ロジャー・ジャクソン
「オウン・ザ・ポディウム」創設者兼初代CEO

バンクーバー冬季オリンピックをさかのぼる2004年、選手団全体が好成績をあげるためにまったく新しいアプローチを行うことになりました。そのプログラムの名前が、「オウン・ザ・ポディウム」という名前でした。オウン・ザ・ポディウムは、このプログラムを命名した機関の名前でもあります。この機関は、選手たちが万全の準備ができるよう焦点をあてた機関です。我々の取組は、選手や彼らをとりまく競技団体、スタッフたちにとって新しい試みでした。

はじめに取り組んだことは、多くのグループの考え方、態度を変革することでした。そして、大会で最善を尽くすだけでなく、明確な目標を設定して達成することとしました。その明確な目標とは、「バンクーバーオリンピックのメダル獲得数第1位、パラリンピックではメダル獲得数第3位」と定めました。

「3位や4位が目標ではない」という意識のもと、我々は各競技の強化に対し積極的にアプローチし、改善点を話し合いました。具体的には、指導者（コーチ、パフォーマンス・ディレクター、技術スタッフ）、選手たちの意識や強化方法などの取り組み、技術強化プログラムの見直し、スポーツ医・科学の観点からの準備支援など多岐にわたりました。

強化当時、行われる競技の14種目のうち、カーリングとアイスホッケーのみが金メダルを狙えるレベルを保っていました。その他の競技も高いレベルではありましたが、他国程の選手層の厚さがなかったことが問題でした。そのため、各競技の選手たちとトップレベルに押し上げると同時に、全体のレベルの底上げに努めました。各競技団体のコーチ・パフォーマンスディレクターたちの関係についてもアドバイスすることがありました。たとえば、各競技団体のスタッフの協力体制が万全であるかどうかなどです。

また、指導者や選手のサポートをするスポーツ医・科学関連のスタッフとの協力体制が確立されていませんでした。各競技団体に必要な専門能力を提供できるように体制を整え、1年を通じて協力体制がとれるようにしました。各競技団体の理事会との協力体制も必要不可欠でしたが、各団体はオリンピックの他にも様々な課題をかかえており、連携がうまくいかないこともありました。コミュニケーションを上手くとりながら、どうしたらスタッフの協力を得ることができるかを考えました。

さまざまな問題点もありましたが、全体的に大会へのモチベーションが高く、また、我々もカナダ政府やバンクーバーオリンピック組織委員会から提供された資金がありました。我々としては、丁寧に、一つ一つの課題を根気よく解決するよう努力し、2010年バンクーバー冬季オリンピック大会においてカナダチームは14の金メダルを含む26個のメダルを獲得しました。開催国としては金メダル数が過去最高、総メダル数は歴代3位でした。

我々は、現在も各競技団体や研究機関と協力しながら彼らの課題を確認し、合理的な結果が得られるようにしています。オウン・ザ・ポディウムのプログラムは現在も進行しています。この経験を生かし、ジュニア選手の育成や各競技団体の強化体制をより良いものにするよう努力していきます。

特別パネルセッション1
試合に向けたコンディショニングサポート

中村礼子（東京スイミングセンター）
奥脇　透（JISSスポーツ医学研究部）
小泉圭介（チーム「ニッポン」マルチサポート事業）

JISSでは中央競技団体（NF）と協力しJOCの強化指定選手、NFの強化対象選手らトップレベルの選手にコンディショニングサポートを行ってきた。今回は、10年にわたって連携を続けてきた日本水泳連盟を例に、どのようなことが行われてきたかを振り返った。

まず、コンディショニングサポートについてJISSスポーツ医学研究部・奥脇透から説明があった。サポート内容としては、スポーツ診療、メディカルチェック、国際大会の帯同の3つが主になる。これら3つのサポートによってメディカルネットワークが構築され、円滑なサポートを行える効果がある。また、実際の診療にフィードバックする他、得たデータは研究にも生かされている。スポーツ診療では、内科、整形外科、歯科のほか栄養、心理など多岐にわたるサポートを受けられる。

マルチサポート事業のリハビリ担当・日本水泳連盟の医事委員と競泳委員としての観点からサポート内容についての話をしたのは小泉圭介。競泳の場合、トレーナーの仕事はマッサージなどが主だったが、最近では外傷の対策としてテーピングやリハビリなどのサポートなどを求められることが多い。

日本水泳連盟の医事委員会と連携した組織として日本水泳ドクター会議と日本水泳トレーナー会議がある。トレーナーは150名在籍しており、医事委員会と連携してさまざまなサポートを行っている。

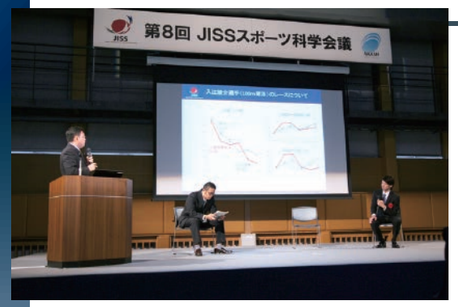
どの競技でも、外傷が原因で競技力の低下がみられるケースがある。競泳の場合、捻挫、腰痛、椎間板ヘルニアなどがあげられる。

今回、競泳・中村礼子氏からは過去数回のケガをきっかけにさまざまな障害をもった話などが紹介された。関節が柔らかかった中村氏は、左足首に負担がかかることが多く、そのため個別のメニューとしてお腹を凹ませて腹圧を上げ、お腹を使う、股関節を使って周囲の筋肉を動かす、肩甲骨をコントロールして上半身をうまく使うようにする、などのトレーニングを行っていた。一見、地味で簡単そうなトレーニングだったがその実はハードなもの。しかし、リハビリは身をもって効果を実感していたそうだ。

調子のいい状態で選手が練習に臨める状態をつくることが大切であり、選手たちに安心してもらえるようなサポートが重要である。

特別パネルセッション2
日々の練習に対する技術サポート

入江陵介（イトマンスイミングスクール）
窪　康之（JISSスポーツ科学研究部）
岩原文彦（チーム「ニッポン」マルチサポート事業）



JISSスポーツ科学研究部の窪康之が、同部が中心に行ってきた動作を改善してパフォーマンスを向上させる技術サポートについて語った。

JISS開所当時、まずシンクロナイズドスイミングのサポートが始まった。各国のプールパターン（水面上でどのような軌跡を描くか）はどうか、水面から選手が身体を出す高さなどについて調べるのが仕事だった。そのほか、ソフトボール、ウエイトリフティング、スキージャンプ、スピードスケートに関して技術的な違いについての研究の成果が説明された。個々の研究員が自主的に各競技の選手、コーチらとコミュニケーションをとってきたが、こうした研究においては、1・バイオメカニクスサポートの現状の把握、2・目標の提示の二つを提案することが重要であったという。

競泳競技に関しては岩原文彦らがレースパターン、水中動作の映像、泳速度のパターンなどの分析を担当した。一例をあげれば、アテネオリンピックの際にはプールの真上にビデオを設置し、時間を記録していき記録を分析した。具体的には、スピードの変化やストローク時間、ストローク長などの数値だ。近年、分析のテクニックが向上したため、およそ2時間で分析結果を選手にフィードバックできるようになった。

また、入江陵介選手の動作について岩原から説明がなされた。泳速に関して、2011年のインカレでの記録をとったところ、前半はほぼ変わらないものの後半では以前よりも0・15秒速くなっていた。前半が同じく2011年の上海の世界水泳に比べてストローク時間・ストローク長が短くなっている。

岩原の分析に対し、入江選手は、上海での世界水泳ではメダルが獲りたい気持ちがあったため、なるべく前半は大きいストロークにし、後半の25メートルで勝負を仕掛けることを心がけていたこと、インカレ・山口国体ではメダルよりもいい記録を出すことを心がけたため前半が積極的な展開になったと自己分析していた。プレッシャーがかかる国際大会など大きな舞台の場合、前半では気持ちを落ち着かせ後半に勝負をかけるレース展開がベターであると判断したそうだ。岩原からは、入江選手に関して世界水泳のようなレース展開は珍しいとの話があり、レース分析についてさかんに意見交換が行われた

特別パネルセッション3
一貫指導システム構築に向けたJISSの役割

青木　剛（財団法人日本水泳連盟）
平野一成（公益財団法人日本オリンピック委員会）
和久貴洋（JISSスポーツ情報研究部）

近年、一貫指導システムの構築が叫ばれている。一貫指導システムはメダルを獲得できるポテンシャルを秘めたアスリートを育てるためのものだ。地域のタレントの人数を拡大すること、メダル獲得につながる素質の高い人間を引っ張り上げてその人材をタレントの時期からポテンシャルの時期、頂点をめざすボディウムの時期のシステムを作り上げることが、一貫指導システムの本質となる。

広く意見を拝聴するため、青木剛氏・日本水泳連盟副会長、平野一成氏・JOCエリートアカデミーディレクターを招いて、和久貴洋司会のもと育成の現状とこれからのJISSのサポートに期待することについて話をうかがうことになった。

まず青木氏から、日本水泳連盟で18年携わったジュニア強化委員時代を振り返ってもらった。以前は、泳ぎの得意な子どもが中学で水泳部に入り競技生活をスタートするケースがほとんどであったが、一貫指導が必要であるという認識が生まれ、スイミングクラブが誕生するきっかけとなった。その後、一貫指導を受けた鈴木大地選手が1988年のソウルオリンピック大会で金メダルを獲得するなど、ピラミッド型の養成システムをつくり上げることに成功している。小学生の選手に関しては、強化合宿を行い、将来何を目標にするのか、一流になるために今やるべきことは何か、情報を提供している。

平野氏からは、エリートアカデミーの現状が語られた。エリートアカデミーは2008年に開校。卓球、レスリング、フェンシングの3競技で高校生12名・中学生24名が在籍している。育成において重要視した点がある。競技力、生活力、知的能力。この3つを伸ばすことが育成につながると考えている。競技成績では、国際大会やユースオリンピック大会で金メダリストが多数誕生している。また、ヴィクトリープログラムと名付けた学習会（週3回）、英会話、言語技術（論理的に考え、コミュニケーション能力を身につける）という講座などを行っている。今後の課題として、競技と勉強の両立の仕方が挙げられる。

人材を見つける力、コーチを育成していくシステムなどは選手を育てるための土台である。その土台をつくるNFらの組織力が求められる。

JISS、この10年の活動

川原　貴（統括研究部長）

国際競技力向上の中枢機関

JISS役割は国際競技力向上のための科学・医学・情報からの支援、そのための研究、そしてスポーツ情報の中枢機関というものでした。設置された経緯は、1960年に日本体育協会や日本体体育学会など5団体が連名で文部科学省（当時文部省）に、国立総合体育研究所の設置の陳情書を出したことに端を発します。正式には1972年の保健体育審議会で研究所研修センターの設置が提案されたのが始まりです。1980年の後半から日本の国際スポーツの競技力が低迷し、研究機関を国際競技力の向上に特化した機関にするという方向で決定しました。1990年に西が丘（東京都北区）に「国立スポーツ科学センター」という名称で設置することとなりました。1993年には実施設計が完成したわけですが、長野オリンピックの開催と国の予算の関係で、着工が遅れました。1998年に着工、2001年に完成しました。

JISSが完成する前年の2000年にスポーツ振興基本計画ができ、そのなかに「スポーツ医科学の活用」が明記され、その役割が書き込まれました。JISSには研究、診療、情報関係の施設の他、研究だけでなく、トレーニング現場があった方が効果的との判断から競泳、体操、レスリングなどの施設が併設されました。トレーニング施設を造ったことがオリンピックをはじめとする各種国際大会での成果に早く結びついた要因だと思います。

施設の特徴は、低酸素に設定が可能な宿泊室、トレーニング室（プールを含む）を備えたことや、MRなどの先端機器がそろっていること、競技に近い動きのなかで動作分析ができるように圧力板と自動動作分析の機器が設置されていることなどです。中でも、カヌー・ボート用の流水施設、大型のトレッドミルなどは他にない施設です。

JISSが完成したときのスローガンは、「挑戦への新しいカタチNew Spirits of Challenge」でした。JISSの組織は科学・医学・情報の三つの研究部と事務の運営部からなります。おもな事業は4つでした。競技力向上に直接貢献するスポーツ医・科学支援事業がメインで、そのベースとしてスポーツ診療、医・科学研究、情報といった事業でした。

スポーツ医・科学研究事業は、国際競技力向上につながる新たな知見を創出することを目的とし、競技団体の要望を踏まえてプロジェクトを設定しました。おおむねオリンピックサイクルを考え、4年のプロジェクトとし、最初は11のプロジェクトでスタートしました。2回目のクールでは、競技横断的な専門分野別のプロジェクトと競技種目に特化した研究に分けました。

2009年からはまた統合し、現在、12のプロジェクト、36の課題を研究しています。現在、行っている研究はコンディションに関すること、低酸素トレーニング、動作分析、心理、栄養、医学、情報、センサ・映像をトレーニングに活用する研究、基礎的な測定法に関する研究などです。

スポーツ情報の主な仕事は、情報の収集・加工・分析・提供です。また国内外のスポーツ関係者とネットワークを構築していくことも行っています。そのなかでも重要なのは地域とのネットワークで、タレント発掘・育成に協力しています。またネットワークを通じて、行政、大学、オリンピック委員会、体育協会、競技団体、アンチドーピング機構、こういったスポーツ関係者、あるいは都道府県などへ定期的にレポートを配信しています。

スポーツ医・科学支援事業の柱は、二つあります。一つはアスリートチェック、もう一つは年間を通じて競技団体の強化計画にそって専門家を配置して支援していくものです。体力、トレーニング指導、動作分析、ゲーム分析、あるいは映像技術、情報技術からの支援など、非常に幅広い面から実施しています。

各競技団体と連携して強化を支援

競技団体への支援は、基本的に競技団体の強化計画があり、何が課題になっているかを話し合いながら実施しています。2001年は試験的に4種別の支援から開始し、2004年には20種別になりました。アテネオリンピックに向けては10種目、施設の中にトレーニング場があったシンクロナイズドスイミング、競泳、レスリング、体操には密な支援を実施しました。競泳ではレース分析、高地合宿に帯同しての支援、ウエイトトレーニング、栄養指導など幅広い支援を行いました。水泳連盟から北島康介選手を中心にサポートしてほしいと依頼され、JISSのスタッフが、「チーム北島」の一員に入りました。

また、レスリングはJISSと新潟県十日町を往復し、栄養、トレーニング、映像分析など、多面的に支援を行いました。

体操は、オリンピックに使用される器具をJISSで用意し、ナショナルチームがこれを使いながらトレーニングしました。この時期、ある体操の実業団のチームがJISSを拠点に行っていました。いろいろな角度から密な支援を行い、アテネでは中心選手となり活躍してくれました。こうした支援もあり、アテネにおいて日本選手団は16個の金メダルを獲得することができました。メダル総数もシドニーから倍増しました。

北京オリンピックに向けては、有力種目の支援だけでなく、フェンシング、陸上のリレーなどそれまで実績の無かった種目への支援にも力を入れました。競泳はアテネに引き続き支援をしました。北京オリンピックはスタート台が変わり、ブロックが導入されるかもしれないという情報を踏まえ、スタート台対策も行ないました。

ソフトボールには最大限の支援をしました。ソフトボールの強化の最大課題は、アメリカ投手陣の剛速球を打つことでした。体力強化や相手投手の分析はもちろん、打撃技術についてもフォームチェックなどを行ないました。

しばらく支援を実施していなかったフェンシングは、2007年から500日合宿を行い、太田雄貴選手が世界を狙える実力をつけ始めていました。協会より支援依頼があり、医学、栄養、体力、メンタルトレーニングなどのサポートを行ないました。

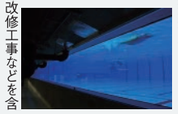
北京では金メダルが9個、アテネより減りましたが、一般の評価としてはソフトボールの金メダル、フェンシングや陸上リレーのメダル獲得等があり、良くやったと評価されました。

これまでの10年をふりかえると、JISS初代のセンター長の浅見俊雄は、我々は黒衣に徹することを方針としました。こちらから押し付けはしない。競技団体から依頼があって初めてその課題に対応する方針を貫きました。競技力向上に貢献するということはまだまだ不十分で問題はありますが、私個人としては点数にすれば70点くらいかと考えています。

JISSの設立時は、行政改革の真っ只中で、研究部の定員が少ししかつきませんでした。現在、任期付の職員が7割で運営しています。4年から5年で入れ替わる。支援を高度化していくには優秀な人材の確保が今後の課題です。

昨年、文部科学省のスポーツ立国戦略が発表されました。そのなかでJISSの機能強化が謳われています。国際競技力向上の活動拠点としてさらに役割が重要になると覚悟しています。

JISS・NTC関連年表

（年）	JISS	NTC	スポーツイベント
1972	保健体育審議会が「体育・スポーツに関する独立した研究機関の設置」を提言		札幌冬季オリンピック／ミュンヘンオリンピック テヘランアジア競技大会
1974			インスブルック冬季オリンピック／モントリオールオリンピック
1976			バンコクアジア競技大会
1978			レークプラシッド冬季オリンピック／モスクワオリンピック
1980	場所が渋谷に決まった		ニューデリーアジア競技大会 サラエボ冬季オリンピック／ロサンゼルスオリンピック
1982			札幌アジア冬季競技大会／ソウルアジア競技大会
1984			カルガリー冬季オリンピック／ソウルオリンピック
1986	文部省に「国立総合体育研究研修センター（仮称）設置準備調査協力者会議」設置 「国立総合体育研究研修センター（仮称）設置準備調査協力者会議」で「国立スポーツ科学センター」に名称変更、日本体育・学校健康センター内に設置し、同センターの保有する北区西が丘競技場の敷地に建設することが決定。		札幌冬季アジア競技大会／北京アジア競技大会
1988			
1990	日本体育・学校健康センターに「国立スポーツ科学センター」設置準備室」設置		
1991			アルベールビル冬季オリンピック／バルセロナオリンピック
1992	国立スポーツ科学センタースポーツ科学に関する調査研究協力者会議」設置、医・科学・情報の施設とともに室内のトレーニング施設を併設する実施設計と内部設置等が決定		
1993			リレハンメル冬季オリンピック 広島アジア競技大会
1994	スポーツ議員連盟が「国立スポーツ科学センターの設置推進」を提言		ハルビン冬季アジア競技大会 アトランタオリンピック
1996	予算措置がされ、平成12年度までの4年計画で建設を開始		
1997	建築工事開始		長野冬季オリンピック バンコクアジア競技大会
1998			カンウォンアジア冬季競技大会
1999		文部省保健体育審議会の答申に「ナショナルレベルのトレーニング拠点の設置」が盛り込まれる	シドニーオリンピック
2000	竣工（2月）、機関設置（4月） 国立スポーツ科学センター開所（10月） JISS開所記念祝賀会 2001年10月 JISS完成	文部省が「スポーツ振興基本計画」を告示、スポーツ医・科学の活用の重要性、ナショナルレベルのトレーニング拠点の早期整備などが盛り込まれる 「ナショナルトレーニングセンターの設置等の在り方に関する調査協力者会議」を設置	
2001	 1999年2月 1999年12月		
2002			
2003	アジアスポーツ科学会議２００３を開催 		ソルトレークシティ冬季オリンピック 釜山アジア競技大会 青森アジア冬季競技大会
2004	第1回JISS国際スポーツ科学会議～挑戦への新しいカタチ～を開催 第2回JISS国際スポーツ科学会議～アテネからトリノ、北京へ～を開催 浅見俊雄（国立スポーツ科学センター長）、秩父宮記念スポーツ医・科学賞功労賞を受賞		
2005	北島選手を中心とした競泳選手への医・科学サポートチーム、秩父宮記念スポーツ医・科学賞奨励賞を受賞		トリノ冬季オリンピック ドーハアジア競技大会
2006	第3回JISSスポーツ科学会議～フィットネスを問う～を開催		
2007	第4回JISSスポーツ科学会議～世界で勝つためのスポーツ科学～を開催 アジアスポーツ科学会議２００７を開催	ナショナルトレーニングセンター「陸上トレーニング場」の竣工・供用開始（1月） 他施設の竣工	長春アジア冬季競技大会
2008	文部科学省委託事業　チーム「ニッポン」マルチサポート事業を受託 第5回JISSスポーツ科学会議～世界で勝つためのスポーツ科学～北京からロンドンへ～を開催	ナショナルトレーニングセンターの全面供用開始（1月） 	北京オリンピック
2009	ソフトボール女子日本代表チームへの医・科学サポートチーム、秩父宮記念スポーツ医・科学賞奨励賞を受賞 ２０１２年ロンドンオリンピックに向けた戦略的情報拠点として「ＮＡＡＳＨロンドン事務所」を組織設置	ナショナルトレーニングセンターの基本設計業務に着手	アテネオリンピック
2010	第6回JISSスポーツ科学会議～世界で勝つためのスポーツ科学～Supporting the Best　を開催 広州アジア競技大会において「マルチサポート・ハウス」を設置 第7回JISSスポーツ科学会議～世界で勝つためのスポーツ科学～Integrity for the Best　を開催 第8回JISSスポーツ科学会議～JISS10年の歩みとこれから～　を開催 シンクロナイズドスイミングプール水深改修工事などを含む施設整備工事完了 	 ネーミングライツを導入「味の素ナショナルトレーニングセンター」と呼称	バンクーバー冬季オリンピック 広州アジア競技大会
2011		 アスリートヴィレッジ南館増築工事完了	ロンドンオリンピック
2012			

NAASH
National Agency for the Advancement of Sports and Health
独立行政法人日本スポーツ振興センター

理事長就任にあたって

独立行政法人日本スポーツ振興センター理事長
河野 一郎

スポーツ界が踏み出す新たな一歩

理事長就任にあたって一言ご挨拶を申し上げます。

昨年は、スポーツ界にとって、節目の年になりました。嘉納治五郎先生が、大日本体育協会を創設してちょうど100年目にあたり、7月には天皇・皇后両陛下のご臨席を賜り、また、ジャック・ロゲIOC会長も参列され、スポーツ界をあげた記念式典が挙行された中で「スポーツ宣言日本」の発表がありました。

また、6月にはスポーツ振興法が50年ぶりに全面改正され、スポーツ基本法が8月に施行されました。

そして、今年は、日本のスポーツ界が101年目の新たな一歩を踏み出す飛躍の年となるとともにロンドンオリンピックが開催され、スポーツに注目が集まる1年となるでしょう。

我々、日本スポーツ振興センター（NAASH）においても、スポーツ基本法及びスポーツ基本計画に沿った活動を具現化する役割が求められており、今後、NAASHの日本スポーツ界における責任はますます重くなると考えております。現在も、NAASHは日本のスポーツの推進のための様々な事業を実施しているところですが、国立競技場の改築とスポーツ振興くじtotoの売上の増加及び効果的な助成の実施については、大きなテーマとして捉え、取り組んでいきたいと考えています。

ロンドンオリンピックに向けて

国立スポーツ科学センター（JISS）については、ロンドンオリンピックに向け、トップアスリートに対する貢献度をさらに高めていく必要があると強く思っています。JISSが受託し、国が進める『チーム「ニッポン」マルチサポート事業』においては、各競技団体との連携のもとで行ってきたサポートや、筑波大学を中心に研究活動を進めてまいりました。その成果をいかんなく発揮できるよう、ロンドンオリンピック本番に向け、これからも日々一層努力していく所存です。

また、ロンドンオリンピック時に設置するマルチサポート・ハウスについて、現在、開設へ向けて、日本選手団の活躍を支える準備を整えつつある状況です。マルチサポート・ハウスは、「情報戦略や医・科学サポートの拠点」をコンセプトとし、分析やコンディショニング、リカバリーなどを中心に、サービスを展開する予定です。

さらにNAASHとしてもロンドンオリンピック対策本部を設け、日本選手団の活動をトータルにサポートしていきたいと考えています。

スポーツを通じて強固な社会組織を

昨年、「NAASHソーシャル・キャピタルプログラム」（NAASH及び各事業において企画・実施する、「ソーシャル・キャピタル」と呼ばれる、スポーツを通じて「信頼」「規範」「絆」が強固な社会組織を育むことにつなげる活動の総称です。）の1つとして、柔道の谷本歩実さんを「SPORTS JAPAN アンバサダー」に任命しました。

谷本さんには、「SPORTS JAPAN」の理念である『スポーツにもっと出会える国へ。もっと勇気をもらえる国へ。みんながスポーツで笑顔になれる、そんなニッポンをつくろう。』のメッセージを広く国民の皆様にお伝えするメッセンジャーとして活躍していただく活動をスタートしています。

前出のスポーツ基本法では、スポーツ立国の実現を目指し、国家戦略としてスポーツに関する施策を総合的かつ計画的に推進し、我が国の発展に寄与することが謳われていますが、今夏に開催されるロンドンオリンピックにおける成果は、スポーツ界のみならず、日本の活力を高めるために大いに寄与すると考えております。

NAASHは様々な事業を通して、コーポレート・メッセージである「未来を育てよう。スポーツの力で。」に込めた「明日への力にあふれた日本の実現」を国民の皆様と一緒に目指して参ります。一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

News Letter JISS 2012
JISS 国立スポーツ科学センター

ニュースレターJISS 2012　平成24年2月29日発行
発行　独立行政法人日本スポーツ振興センター国立スポーツ科学センター
編集・発行者　岩上安孝
〒115-0056　東京都北区西が丘3-15-1　http://naash.go.jp/jiss/
編集協力　株式会社小林事務所、山岸淳デザイン株式会社、笹井孝祐、柳田直子